

## 和文要旨

### ブルガリア語ブラネシュティ方言における補語の接語重複 —言語接触と文法化—

菅井健太

本論文は、ブルガリア語ブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複の形式及び語用論的な観点からの記述に加え、言語接触と文法化の観点からの分析を行うものである。

補語の接語重複とは、同一文構造中において同一指示の接語形代名詞によって補語を二重化する現象を指す。ブルガリア語をはじめ、バルカン諸語に広くみられる現象であり、様々なアプローチから多くの研究がなされているため、当該分野における研究の蓄積は大きい。しかし、ブルガリア語の方言、特にブルガリア国外（ルーマニア）に孤立的に分布しているブルガリア語方言は、補語の接語重複の研究対象として今までほとんど顧みられることがなかった。したがって、本論文は、そのようなブルガリア語方言の一つであるブラネシュティ方言を対象とし、その方言に観察される補語の接語重複の研究を試みるものである。

ブラネシュティ方言話者がルーマニア語とのバイリンガルであるため、言語接触によって何らかの言語変化が生じたと仮定することができる。本論文の目的は、補語の接語重複を対象とした記述・研究を行うと同時に、言語接触による言語変化の仕組みを明らかにすることにある。

第 1 章では、ブルガリア語とブルガリア語の方言についての概要を述べ、特にブルガリア語方言の方言区分など、本論文の前提となる情報を提示した。

第 2 章では、標準ブルガリア語の人称代名詞接語形と、補語の接語重複の特徴を概観した。

人称代名詞接語形は、基本的に動詞に隣接するが、エンクリティックであるため、文中での位置によっては、動詞に対して前置されることも、後置されることもある。

補語の接語重複については、まず、それが一般的にトピック標示の機能を持つ現象であることを確認した。そして、補語(N)が動詞前に置かれるか、動詞後に置かれるかで、大きく分けて 2 つの接語重複の構造（接語重複の結果生じたものを指す）があることを見た。特に動詞前では、HTLD と CLLD が分けられるこ

とについても述べた。

第3章では、ブラネシュティ方言の補語の接語重複の形式及び機能の特徴について記述・分析を行った。

まず、ブラネシュティ方言の人称代名詞接語形が持つ特徴の記述を行った。標準語とは異なり、文中の位置にかかわらず、動詞に対して前置される語順が広く用いられ、統語論上の自由度が標準語と比較して低く、接語というよりは接辞に近い特性を示す。またこのような語順が概ねルーマニア語と共通していることも指摘した。

次に、ブラネシュティ方言で用いられるルーマニア語から借用された対格標識の前置詞 **пъ/pă** の分析を行い、それが有生か定である名詞句に対して用いられるという用法上の特徴を明らかにした。特に語彙的に常に定で有生である人称代名詞非接語形は、**пъ/pă** と義務的に共起することも述べた。

そして、前置詞 **пъ/pă** を伴う直接補語の接語重複が、それを伴わない直接補語の接語重複と異なったふるまいを示すことを指摘した。まず、**пъ/pă** を義務的に伴う人称代名詞非接語形対格が直接補語(N)である場合には、動詞前におかれようが、動詞後におかれようが、接語重複は義務的に行われる。それ以外の名詞句については、**пъ/pă** を伴う場合には、動詞後にあるときに頻繁に接語重複する一方で、**пъ/pă** を伴わない場合は、標準ブルガリア語やブルガリア国内の同系統の方言と同じように、動詞前にあるときに頻繁に接語重複する。つまり、ブラネシュティ方言では、**пъ/pă** を伴う場合に限り、動詞後の補語の接語重複が広く用いられ、標準語やブルガリア国内の方言とは異なった特異なふるまいがみられることを示した。

また、ブラネシュティ方言にも、身体・心理的な感覚や状態を表す述語が用いられる際に文法化重複が観察されるとともに、その特徴が標準ブルガリア語と一致していることを述べた。

接語重複の構造の分析もおこなった。動詞前では HTLD や Na-drop 現象などが見られるという点で、動詞後では RD が制限的である点で、標準ブルガリア語と全体的に共通した特徴がみられることを明らかにした。逆に標準ブルガリア語との違いは、**пъ/pă** が関与する場合にのみ見られることを指摘した。

最後に、接語重複の語用論的な機能の分析をおこなった。ブラネシュティ方言の場合も、標準語やブルガリア国内の方言と同様に、基本的にトピック標示が主たる機能である。しかしながら、フォーカスである補語の接語重複も見られることから、接語重複する補語(N)とトピックとの関係性が希薄となる傾向にあることを指摘した。

第4章では、ブラネシュティ方言の接語重複を文法化の観点から分析し、特

に **пъ/pǎ** を伴う補語の接語重複が、ルーマニア語との言語接触によって、どのようにもたらされ、どの程度文法化したかということについて論じた。

まず、接語重複の文法化がどのように行われ、進行するののかについて、接語重複の用法やふるまいが大きく異なる標準ブルガリア語と標準マケドニア語を例に概観した。補語の接語重複は、もともと補語(N)をトピック標示するという語用論的な手段として始まるが、人称代名詞接語形(Ncl)が再分析の過程を経て補語と一致する文法的な標識に変化することで、より文法的な手段への変化、すなわち文法化がおこなわれることを示した。

そのうえで、ブラネシュティ方言と同系統であるブルガリア国内のブルガリア語北東方言（ミジヤ方言群）の接語重複のふるまいを明らかにする目的で、方言地図を用いた分析を行い、北東方言では、接語重複の文法化の程度が低く、語用論的な手段にとどまっていることを指摘した。また、それと同時に、補語の接語重複のふるまいが方言のレベルでは多様であるばかりでなく、北東から南西にかけて、接語重複の文法化の程度が段階的に高くなることを確認した。南西マケドニアにおいて補語の接語重複の文法化の程度が最も高いのは、バルカン随一の多民族多言語環境での言語接触が文法化の促進に果たした役割が大きいことを示している。

これらのことから、補語の接語重複の文法化の程度が低い北東方言（ミジヤ方言群）と同系統であるブラネシュティ方言は、ルーマニア語との言語接触によって文法化が推し進められたという仮説を立てて分析を行った。

まず、文法化が言語接触によってもたらされる仕組みについて概観し、ブラネシュティ方言にみられる **пъ/pǎ** を伴う補語の接語重複が、ルーマニア語の **pe** を伴う補語の接語重複をモデルとした文法複製によって、より広範なコンテクストに適用されうる主要な使用パターンに変化していることを指摘した。

次に、類型論的な見地から提案された文法化のパラメーターを用いて、ブラネシュティ方言の補語の接語重複が、4つの文法化のパラメーターすべて、すなわち新しい文脈への「拡張」、人称代名詞接語形(Ncl)が持つ代名詞の意味特徴の消失である「脱意味化」、人称代名詞接語形の形態統語論的な特徴の消失である「脱カテゴリー化」、そして部分的にはあるが人称代名詞接語形の音声的実体の一部の喪失に関わる「浸食」が見られることを明らかにした。このことから、ブラネシュティ方言の補語の接語重複は、かなりの程度文法化していると指摘した。

そして、最後に、ブラネシュティ方言の接語重複の文法化の程度について論じた。直接補語がどのような名詞句によって表されるかによって文法化の程度が異なると考えられ、実際に、文法化の程度は、直接補語が **пъ/pǎ** を伴う人称代名詞非接語形対格によってあらわされるときに最も高い。それ以外の名詞句でも **пъ/pǎ** を伴う場合にのみ接語重複が生起するコンテクストが拡大するなど、再分

析を通じた無標化が進行していることが見受けられ、文法化が一定程度進行していることがわかる。

一方で、**пъ/pă** を伴わない補語の接語重複はトピック標示の機能と密接に結びついていることから、語用論的に有標であることは明白である。つまり、**пъ/pă** を伴わない場合の接語重複は、文法化の程度が低い。

ルーマニア語からもたらされた前置詞 **пъ/pă** を伴う場合に限って、補語の接語重複の文法化が進んでいるのは、同現象の文法化がルーマニア語との言語接触によってもたらされたとすることで説明できる。実際に、ブラネシュティ方言にみられる **пъ/pă** を伴う直接補語の接語重複は、ルーマニア語の **pe** を伴う直接補語の接語重複と酷似していることから、ルーマニア語をモデルとした文法複製が行われることで、文法化が促進されたと考えることができる。

第5章において、次のような結論に達した。

ブラネシュティ方言の補語の接語重複は、ルーマニア語との言語接触によって文法化が推し進められた。

具体的には、ルーマニア語の前置詞 **pe** を伴う接語重複をモデルとして、ブラネシュティ方言に **пъ/pă** を伴う接語重複が複製され、その過程で補語の接語重複の文法化が促進された。特に **пъ/pă** を伴う名詞句（とりわけ、人称代名詞非接語形対格）が直接補語(N)である場合には、その補語と同一指示である人称代名詞接語形は代名詞から補語の一致標識への再分析が行われており、その結果として接語重複が語用論的に無標な現象へ変化したと言える。このようにして、接語重複は語用論的な手段から文法的な手段へと変化を遂げた結論付けた。